



大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 3846 号 2017.8.20 発行

ダウン症版母子手帳を発行 ゆっくりな成長に応じ記録 共同通信 2017年8月19日



日本ダウン症協会が発行した「子育て手帳 +Happy しあわせのたね」

ダウン症のある赤ちゃんを持った親が子どものゆっくりな成長に合わせて記入しやすいよう工夫した母子手帳を、日本ダウン症協会が発行した。

「子育て手帳 +Happy しあわせのたね」という名称でダウン症の子どもを持つ

つ東海地方の母親サークルが企画・制作。前半には先輩パパ・ママのメッセージや体験談を載せ、後半に予防接種や成長の記録、うれしかったことなどを書き込めるようにした。

無料で配布（送料 100 円）しているほか、専用サイトからダウンロードできる。申し込みなど詳しい情報は専用サイト（<http://www.jdss.or.jp/tane2017/>）に掲載されている。

似顔絵描き 社会とつながる 知的障害の男性、羽咋のカフェで



中日新聞 2017年8月19日
描いた似顔絵を差し出す「ゆう君」こと三角裕さん（右）。赤色のハンチングがお似合いだ＝石川県羽咋市大川町で

水曜午後。石川県羽咋市大川町のカフェ夢生民（むうみん）に、赤色のチェック柄のハンチングをかぶった似顔絵描き「ゆう君」がスタンバイする。三角裕（みすみゆう）さん（32）＝羽咋市。お客さんと向き合って、縦二十センチ、横八センチほどの段ボールにフェルトペンを走らせる。（小塚泉）

鼻歌を歌うようにサラサラと。途中で「名前は」と尋ね、最後に足元を見つめて全身を描き、五分もすれば出来上がり。

角を丸く切り取り、自身の「裕」と、相手の名前をひらがなで書き添えて、「はい」と差し出せば、カフェに立ち込めるコーヒーの香りがフワッと場を包む。

知的障害があり、特別支援学校を卒業後、一般社団法人つながりが運営する就労支援施設「楽生（らっきい）」で働く。バザーで三角さんの似顔絵コーナーを設けたら好評だったことから、一年ほど前から週一回、同じ、つながりの施設「夢生民」に出るようになった。

絵を描くのが得意。カレーライスやピリ辛めん、アイスコーヒー。カフェのメニューの絵も三角さん作。花火の絵は、ギフトボックスののし紙に採用されて人気を博す。同県輪島市から週一回、楽生に講師として訪れている坂下美佐子さん（55）のアイデアでキーホルダーなどにもなった。

化粧をしてこなかった女性の求めに応じてメイクを施したり、襟元にフリルを付けてあげたりする気配りも。「年上の女性に人気です」と、三角さんと接するカフェ担当スタッフの小松寿美さん（47）が言う。「お母さんとおばあちゃん、お孫さんが一緒に来て、それぞれの部屋に飾ると言って喜ぶ姿も見ました」

同県志賀町から訪れて、似顔絵を描いてもらった大島洋明さん（41）は「うれしい。宝物にします」と、思わず三角さんの手を握った。

施設長の吉田まゆみさん（54）は「好きなこと、得意なことが商品になっていくのを見て、言葉にはしなくてもうれしいだろうと思います。私たちもうれしいです」。その先に「デザイン料につながり仕事として成り立てば。自立は難しくても、本人の支えになってほしい」と期待する。

夢生民の名前には「夢を持って生きていきたいね」との利用者の思いが詰まっている。

カフェには、三角さんが描いた似顔絵が百枚余り並んでいる。子どもも大人も。男性も女性も。ゆう君の絵が、みんなと、地域とをつないでいる。

京都・長岡京の通所者、花壇整備 国交省から表彰へ 京都新聞 2017年8月19日

京都府長岡京市井ノ内の社会福祉法人あらぐさ福祉会が運営する知的障害者通所施設などの利用者が、近くの府道沿いに花壇を整備している。季節の花を植え、草引きや水やりも欠かさなかった。活動開始から7年を迎え、道路愛護団体として国土交通省からの表彰も決まった。関係者は「表彰をきっかけに地域との連携をもっと広げていければ」と、意気込みを新たにしている。



府道沿いの花壇に花の苗を植える通所者や職員。長年の活動が国に評価され表彰を受ける（長岡京市井ノ内）

活動は「あらぐさ☆はなさか隊」と命名。府民ぐるみで美しい道路保全を進める府の事業「さわやかボランティア・ロード」の認定を2010年末に受け、取り組みを始めた。同福祉会の近くに10平方メートルほどの花壇が四つあり、現在は59人の通所者が数班に分かれて手入れしている。

花壇には、企業から寄贈を受けたアジサイやツツジをはじめ、施設で生産したペチュニアやビオラなどを育てている。このほど、ペンタスやアスターステラを植えた。通所者や職員12人は厳しい日差しの下、雑草を抜いた後に1株ずつ丁寧に植え込み、土をかぶせて水やりをした。

以前、通所者が施設周辺道路に目立っていたごみに心を痛め、みんなで道路清掃をしていたことが、後の同隊結成につながった。こうした地道な活動が評価され、道路ふれあい月間（8月1～31日）にちなんで国から表彰されることになった。

表彰式は23日、府乙訓土木事務所（向日市上植野町）で行われる。あらぐさ福祉会の永崎靖彦統括事業長は「表彰に驚いている。通所者は、通行人の『きれいだね』という声を励みにしており、やってきたことが評価されてうれしい」と話す。

「もやい音楽祭」の詩を募集 水俣、来月15日まで 読売新聞 2017年08月19日
水俣病被害者や障害者らの詩を歌にして発表する「第11回もやい音楽祭」実行委員会（水俣市）は、2018年度の音楽祭で披露する詩を募集している。締め切りは9月15日。

音楽祭は例年1、2月頃に水俣市で開催されていたが、インフルエンザの流行期などに重なるため、今回は、時期をずらす方向で調整している。応募作から、音楽療法の専門家らが入選作を選び、10月中旬から作品につける曲を募集する。

応募資格は九州在住か通勤通学者。氏名や年齢、住所、電話番号、障害の状態、作品名、詩に込めた思いを明記し、実行委事務局のもやい館もやい音楽祭係に郵送（〒867・0005 水俣市牧ノ内3の1）やメール(sinkou-m@tulip.ocn.ne.jp)などで応募する。問い合わせは同館（0966・62・3120）へ

血液1滴でがん13種類診断 早期発見へ新検査法 共同通信 2017年8月19日

1滴の血液から13種類のがんの有無を同時に診断できる検査法を国立がん研究センターなどのチームが開発した。がんが分泌する微小な物質を検出する。「腫瘍マーカー」を使う現在の血液検査と比べ発見率が高く、ごく初期のがんも見つけられるのが特長という。

チームはがん患者らを対象とした臨床研究を進め、数年以内に国の承認を得たい考え。センターの落谷孝広・分野長は「患者の体への負担が少ない検査になる。早期発見できれば、より効果的な治療ができ、医療費削減にもつながる」と話している。費用は2万円になる見込み。

<パラ種目>ボッチャ普及へ連続講座 仙台で来月スタート



河北新報 2017年8月19日

障害や年齢を問わず楽しめる欧州発祥の球技「ボッチャ」の普及を図ろうと、仙台市若林区中央市民センターがボッチャの連続講座を初めて開く。パラリンピック日本代表の活躍でボッチャへの関心が高まる中、競技をつかさどるスタッフを養成し、各地で試合ができる環境を整える。

ボッチャに興じる愛好会の参加者

講座は9月2日以降、市民センターなどを会場に11月まで5回を予定。重度の脳性まひの人向けに考案されたボッチャの歴史やルールを学んだり、障

害者や高齢者の不便さを知るキャップハンディ体験をしたりする。市民センターで月1回ある愛好会にも参加し、審判などを務める。

ボッチャはパラリンピック正式種目。3人ずつ2組に分かれ、投げたボールを的のボールのより近くに止めた組が勝ちとなる。

昨年のリオデジャネイロ・パラリンピックで、日本代表チームがボッチャ初のメダル（銀）を獲得してから知名度が向上。町内会などででも広がり、運営の担い手が必要になっていた。

講師を務める市障害者スポーツ協会の横田昌宏理事（57）は「ゲームで声を掛け合うのですぐに打ち解けられる。初心者が勝つこともあり、住民同士のつながりを育むのにひ

つたりのスポーツ。地域の取り組みに生かしてほしい」と話す。

定員30人。参加無料。連絡先は若林区中央市民センター022(282)1173。

水陸両用の車いす、ビーチでも楽しめます 神戸の須磨海岸



産経新聞 2017年8月19日
水陸両用の車いす「ヒッポキャンプ」に乗り、海を楽しむ中井世蓮さんら＝19日、神戸市の須磨海岸

神戸市須磨区の須磨海岸で19日、海水浴場のバリアフリーを進めるグループが、水陸両用の車いす「ヒッポキャンプ」の体験イベントを開催した。車いす利用者も楽しめる機会をつくろうと企画。強い日差しが照りつける中、参加者は乗り心地を確かめ、波の揺れを体感した。

肢体不自由の中井世蓮さん(15)＝奈良県河合町＝は救命胴衣を着け、ヒッポキャンプごと海に入った。父親の誠さん(40)らが介助し、浅

瀬で車いすから降りると、初めて波を感じた世蓮さんは声を上げて喜んだ。

誠さんは「プールが好きだったが、海に行くきっかけがなかった。いろんなことに挑戦してほしい」と娘の手を握りしめた。

ヒッポキャンプはフランス製で、足を置く部分にも大きなタイヤが付き、三輪になっている。寝そべった状態でも乗り降りが可能で、海外では災害救助でも活用されているという。

グループのメンバーは障害者やライフセーバーらで、須磨海岸を中心に活動。今夏は、車いすに乗って波打ち際まで行けるように砂浜に敷くビーチマットも導入した。

「コナンまつり」で音声ガイド…「声が主役のイベントならでは」



産経新聞 2017年8月19日
「名探偵コナンまつり」で導入された、視覚障害者向けの音声ガイドを利用する女性＝19日午後、鳥取市

鳥取県主催の無料イベント「名探偵コナンまつり」が19日、鳥取市で開かれ、アニメの主人公江戸川コナン役の声優高山みなみさんらが登場した。県は、視覚障害者向けの音声ガイドや手話通訳などのバリアフリー対応を充実させ、目や耳が不自由な人も楽しんだ。

コナンまつりは5年目で、声優らのトークショーや、作品の映像に合わせてせりふを披露する「アフレコ」が目玉。

音声ガイドの本格的な導入は今年が初めてで、ナレーターが、出演者の舞台上の立ち位置や動き、会場の雰囲気をお

く解説した。

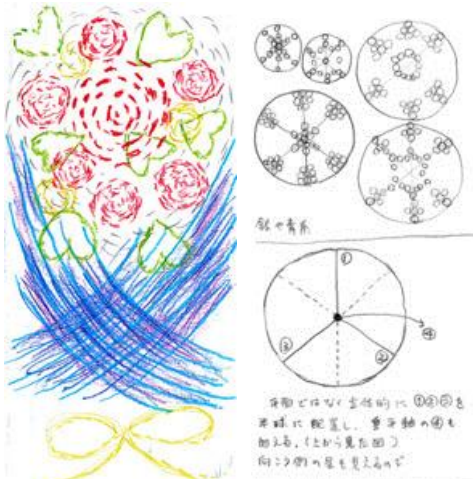
イベントの担当者は「福祉系の催しや映画で導入が進んでいるが、娯楽イベントなどではまだ少ない。声が主役のイベントこそ、目が見えない人に楽しんでほしかった」と理由を話した。

音声ガイドを利用した鳥取県米子市の30代の女性は「(健常者の)他の人がなんで笑っているのか、リアルタイムに分かる。取り残される感じがなく、とても楽しかった」と喜んでいました。

鳥取県は2013年に全国初の手話言語条例を制定するなど、障害者らを含め暮らしやすい地域づくりに力を入れている。

障害者のデザイン、夜空に咲け 多摩川で今夜初披露 野村周平

朝日新聞 2017年8月19日



日本の「わびさび」を意識した「松竹梅」

「祝いの花」と題する花火のデザイン画を持つ森田義男さん＝東京都港区のアプローチ南青山

東京五輪・パラリンピックに向け、障害がある人々と花火師が協力し、花火作りに挑戦している。今年5月から試行錯誤を続け、19日夜、東京と神奈川の境を流れる多摩川の花火大会で披露される。花火の絵柄をデザインした障害者の一人は「2020年にも自

分の花火を見てもらえたら」と夢を描く。

デザインを担当したのは、障害者の就労支援事業所「アプローチ南青山」（東京都港区）に通う男女6人。ふだんは花束やフラワーアレンジメントを作っている。東京五輪に向け、障害者の社会参加などにつながる企画を支援する国の委託事業に、一般社団法人「日本花火推進協会」が応募したのが



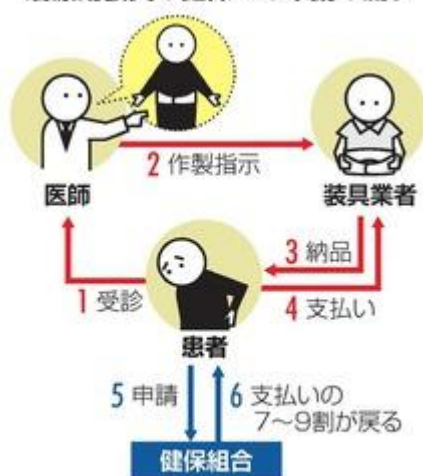
きっかけで、協会とアプローズが一緒に取り組んできた。

「自分がデザインした花火が打ち上げられるなんて夢のよう」。参加者の一人、森田義男さん（45）は興奮を隠せない。出版物のデザイナーだったが、くも膜下出血を患い、5度の手術を受けた影響で記憶や身体に障害がある。3年前から事業所に通い始め、今は週2回ほど作業している。今回は「祝いの木」とも呼ばれるギンバイカの白い花をモチーフに、デザイン画を描いた。「日本に来た人たちを、お祝いの気持ちでもてなしたい」

初の披露の場になるのは、多摩川を挟んで19日夜に同時開催される「世田谷区たまがわ花火大会」（同区など主催）と「多摩川花火大会」（川崎市など主催）。計1万2千発以上が打ち上げられるが、イチョウの葉や松竹梅などを表現した6人の計6作品も夜空を彩る。

安眠枕、オーダーメイド靴…治療用装具で不正請求相次ぐ 沢伸也、月舘彩子

治療用装具の健保への申請の流れ



不正申請 安眠枕など認められない装具を作製 医師の診断前に業者が作製 など

安眠枕など認められない装具を作製 医師の診断前に業者が作製 などの不正申請は、装具の現物や写真を示す義務がない。このため、不正な請求であっても健保組合のチェックをすり抜けていた。

健保組合の内部資料などによると、安眠枕を作ったうえで請求していたのは、首の痛みなどで名古屋市内の整形外科に通っていた患者ら。装具業者は「夜間用の頸椎装具」と主張し、医師は枕と知りつつ証明書類を出していた。

東京都内の装具業者はホームページなどで「10万～14万円のオーダーメイド靴が健康保険で7～9割引きになる」と宣伝。通院していない客が店を訪れ、まず靴を作り、事後的に提携の医療機関が証明書類を出していた。医師は完成後のチェックもしていなかった。

花粉症・うつ病、共生細菌の減少が原因？ 山極寿一氏 朝日新聞 2017年8月20日

■科学季評 京都大学総長・山極寿一さん

細菌の働きを利用して人の体や心を治療する。そんな時代がやってくるかもしれない。

私たちの調査チームは4年前、アフリカ・ガボンのゴリラに新種のビフィズス菌を発見した。ビフィズス菌は腸内細菌の一つで、今までさまざまな動物に50種ほど見つかり、人間は10種類と最多のビフィズス菌を持つ。新種の菌の生理活性はまだ明らかでないが、ビフィズス菌は糖を分解して吸収しやすくし、他の菌による腐敗を防ぐ働きをする。腸内細菌の中でも量が多く、長寿をもたらす効果があると考えられている。

近年、立て続けに人と細菌の共生に関する本が出版された。今や細菌ブーム到来と言ってもいい。



山極寿一さん

食中毒を引き起こすサルモネラ菌をはじめとして、数々の感染症を引き起こす細菌は、根絶すべき対象と考えられてきた。衛生意識と予防医療は、細菌との闘いによって作られてきたといっても過言ではない。しかし、細菌の中にはビフィズス菌のように健康や長寿をもたらすものもあるし、圧倒的な数の細菌と人はむしろ共生してきたと考えるべきだということが最近分かってきた。

人の腸内には1千種類以上の腸内細菌が約500兆～1千兆個も存在し、重さは約1・5キログラムにもものぼる。これらの細菌は病気を防ぐ働きをする。抗生物質を用いて病気を治した方がいいが、共生細菌を死滅させてしまい、かえって免疫能力が減退してしまうことがある。

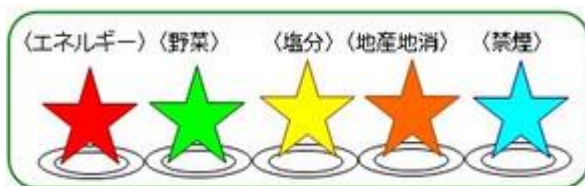
かつて法定伝染病といわれた細菌による感染症はほぼ消滅した。かわりにアトピー性皮膚炎、花粉症、小麦アレルギー、1型糖尿病など、人の免疫系に関する病気や胃腸疾患が急増している。体の病気だけではない。うつ病、強迫性障害などの心の病も蔓延（まんえん）している。環境汚染や社会不安が増加したせいだと考えられてきたが、実は抗生物質や抗菌剤などの過度な使用により、共生細菌が減ったり、バランスを崩したりしたことも原因だという証拠が次々に発見されている。

子どもの自殺防げ 電話相談窓口終了時間延長 大阪日日新聞 2017年8月19日

18歳以下の子どもの悩み相談を受ける、電話相談窓口「チャイルドライン」は23日から、従来の窓口の終了時間を午後9時から深夜午前0時まで延長する。9月5日までの14日間実施し、夏休み明け前後に増える子どもの自殺を防ぐのが狙い。「チャイルドライン」は、虐待やいじめなど18歳以下の子どもたちが日々抱える悩みに、ボランティアスタッフが相談に乗る専用電話。フリーダイヤルで、通常は月曜日から土曜日の午後4時から同9時の開設だが、夏休み終了を前に時間を延長する。内閣府によると、1972年から2013年の42年間で、18歳以下の自殺者は1万8048人。自殺した日を分析したところ、夏休み明けの9月1日が最も多くなっているほか、春休みやゴールデンウィークなど長期休業明け直後に、自殺者が増える傾向があるという。今回、キャンペーンに取り組む、吹田市の市民団体「こらぼれチップス・チャイルドラインすいた」の岡本祥子代表（59）は「いじめや不登校を経験した子どもにとって、長期の休み明けは大きなプレッシャーが生じやすい。思い詰める前にまずは電話して」と呼び掛けている。

◇「チャイルドライン」の電話番号はフリーダイヤル（0120）997777。

この店の健康メニュー「☆」いくつ？ 自治体が認定へ 中野龍三



朝日新聞 2017年8月20日
健康いぬやま応援メニューで認定される星マーク＝愛知県犬山市提供

このメニューは星いくつ？ 外食でも食生活に気を付けてもらおうと、健康を意識したメニューを提供する飲食店を認定

する事業を愛知県犬山市が始める。認定基準を満たした項目を星マークで表示、「ミシュランガイド」さながらに市民に分かりやすく関心を持ってもらう試みだ。

この事業は「健康いぬやま応援メニュー」。健康に配慮した五つの基準のうち三つ以上を

満たし、さらに名前や見た目などに犬山らしさを盛り込んだメニューを出す市内の飲食店を認定。認定項目を表した星マークを入り口などに掲示してもらう。

基準は、700キロカロリー以内▽野菜を120グラム以上使用▽塩分が3グラム以内▽県産食材を1品以上使用▽店内全面禁煙——の五つ。厚生労働省が推奨する目安などから定めた。

社説 離婚と面会交流 子どもの幸せ最優先に 北海道新聞 2017年8月20日

離婚や別居で離ればなれになった親と子が定期的に出会う「面会交流」を巡り、父母がもめるケースが後を絶たない。

全国の家裁に昨年申し立てられた調停や審判は約1万4千件にのぼり、10年前の2倍を超す。

少子化に加えて、親権を失っても育児に参加したい父親の増加などが背景にあるという。

面会の時間や回数、方法をどうするか。本来は父母がじっくり話し合うべきだが、当事者だけでは解決が難しいこともある。

ならば、行政や民間団体をはじめ、社会全体で円滑な面会を支える。子の幸せを最優先に、そうした取り組みを充実させたい。

欧米では、離婚後も父母双方が養育する共同親権制度の国が少ないが、日本は父母いずれかの単独親権しか認めていない。

このため、「子に会いたい」「会わせたくない」という問題が起こりがちだ。

トラブルの増加を受けて2011年に改正された民法は、面会交流や養育費の分担について、子の利益を最も考慮して決めると明文化している。

親は、この法の趣旨を忘れてはならない。子の成長にとって、離婚後も父母双方とつながりを持ち続け、愛情を実感できることは大切なことだ。

とはいえ、核家族が当たり前のいま、父母が配偶者以外に相談したり、協力をあおいだりするのは容易なことではあるまい。

離婚時に感情的になっていたり、そもそも連絡が途絶えたりしていれば、解決はさらに遠のく。

そこで期待されるのが、行政や民間団体といった第三者によるサポートである。

先進的な例が、兵庫県明石市の取り組みだ。相談対応にとどまらず、面会の場所を提供したり、父母が顔を合わせなくても済むよう、子の引き合わせを仲立ちしたりしている。

子どもを社会全体で育もうとする施策として、うなずける。

一方、離婚や別居の原因が家庭内暴力や児童虐待などにある場合は、細心の注意が必要だ。家裁の許可を得た面会交流であっても、子を殺害し、親も自殺するような事件が起きている。

子が面会を嫌がったり、危害を加えられる恐れがあるときは無論、会わせるべきではない。

痛ましい事件を繰り返さないため、関係機関は可能な限り、面会の可否を慎重に見極める。そうした対応が不可欠だ。

月刊情報誌「太陽の子」、隔月本人新聞「青空新聞」、社内誌「つなぐちゃんベクトル」、ネット情報「たまにブログ」も



大阪市天王寺区生玉前町5-33 社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所発行